



演奏と結びついて進化する コンサートホールの音響

舞台芸術分野の人材育成を行う東京芸術劇場の「アーツアカデミー」が、音響設計家の豊田泰久氏を迎えてコンサートホールの音響をテーマに公開ゼミを開催した。

ゼミは「東京芸術劇場のコンサートホールについて」と題し、ホールの特性や音響と演奏との結びつきなどをトピックスに展開された(5月2日)。

まず、東京芸術劇場の鈴木順子事業企画課長からコンサートホールの歴史について概説。大別すると、シューボックス(直方体)型とヴァンヤード(舞台を客席が段々と囲む)型に分かれ、歴史的なホールは前者だが、ベルリンのフィルハーモニー以降、後者が多くつくられてきたことを紹介した。

続いて豊田氏より「コンサートホールは多目的ホールと異なって生の響きを届けることを前提としており、音響の良し悪しはホールの形と材料で決まる。天井の高さ、壁の位置や角度など重要な要素はいくつもあるが、一旦つくったら変えられない点が難しい」と講義開始。ウィーンの楽友協会ホールを例に、シューボックス型で横幅が狭く反射音がまんべんなく得られることで良い音響になっていること、現在の建築基準などの法規制に照らすと同じ面積では客席数の少ないホールしか建築できず、今は同じホールを建設できないことなどが紹介された。さらに、コンピュータの発展がコンサートホールの設計



東京芸術劇場 プロフェッショナル人材養成研修 公開ゼミ
劇場を考えるシリーズ<東京芸術劇場編>
第2回 5月2日(木・休)「東京芸術劇場のコンサートホールについて」
講師: (写真左より) 豊田泰久(音響設計家)
鈴木順子(東京芸術劇場 事業企画課長)

にもたらした変化、他方でコンピュータではわからない部分に対処するため、10分の1の模型を使って実験を行っていること、また近年、新しい時代のコンサートの楽しみ方の提示という観点からコミュニケーションを重視

し、観客どうしの顔が見えるという利点からヴァンヤード型を選ぶクライアントが多いことなどに話が展開していった。

後半は、1990年にヴァンヤード型のホールとして誕生した東京芸術劇場が、2011年から1年半にわたって行った改修工事を経てどう進化したのか、鈴木課長より具体的に説明。当初からオーケストラの曲がよい環境で聴けると評価されてきたホールだったが、改修はより創造発信型の劇場にするという劇場のあり方を柱に、容積が大きくマーラーや合唱が入る大編成の作品が多く演奏されてきたことやオルガンなどの特徴をふまえ、それらにより適した音響にする目的で実施された。主な改修点は、舞台の床を低音の響きがさらに伝わるようナラ材からヒノキ材に張り替えたこと。音をより拡散させて響きを複雑にするため、ホール側壁の大理石に木製のリブ材を取り付けたこと。舞台奥が合唱を入れると狭かったため、舞台を前に90センチ張り出して広くしたことなど。天井の音響反射板もオーケストラ、オルガンそれぞれに適した角度などを研究して音響条件を整備した。また、以前より事業提携を結んでいる読売日本交響楽団が前日のリハーサルでもできるだけホールを使えるように努力していること、さらに東京都交響楽団など定期公演に使う楽団が4つに増えたことで、ホールのよい響きを掴んでよい演奏を届けるということが毎日のように行われるようになった結果、ハーディング、ノット、ヤンソンら世界的なマエストロをはじめ、音響への高い評価が得られるように変化したことが紹介された。

最後の質疑応答では、ホールの形と材料を決めるにあたっての建築家の姿勢の違いやホールの材質と音楽家のメンタル面の関係など興味深い話題が続いた。

文: 潮博恵(音楽ジャーナリスト)

I N F O R M A T I O N

第17回 東京フラフェスタin池袋2019

7月19日(金)・20日(土)・21日(日) 池袋駅西口駅前広場・東武百貨店8階屋上 ほか

にゅ〜盆踊り

8月12日(月・休) 東池袋中央公園

鑑賞サポート | 目や耳の不自由な方を対象に、舞台・公演説明会、字幕機提供サービス(対象日限定・無料・要事前申込)等を実施しています。詳細は事業ごとに異なります。

7~9月
対象公演

東京芸術劇場ランチタイム・パイプオルガンコンサートVol.133、134
東京芸術劇場ナイトタイム・パイプオルガンコンサートVol.28
お気に召すまま

【お問合せ】東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296